津久根八幡神社と獅子舞の歴史

鎌倉時代に八幡社（応神天皇）を勧請して若宮と称した。これを物語る宝物の金剛盤に正嘉２年（１２５８）の銘がある。また、現在の社殿は天保４年（１８３３）に建立され、間口７尺奥行９尺流れ造りの柿葺きで、本殿を飾る彫物は、川越氷川神社本殿などと同じ江戸浅草の彫師・嶋村源蔵が手がけた。獅子舞は享保年間（１７１６～３６）に成瀬の諏訪神社（弘法山）の祭礼で行われていたものを、津久根の人形芝居と交換して始められたという。昭和３０年代にしばらく途絶えていたが昭和４８年に保存会を結成して復興し、３００年の歴史ある伝統の舞を今に伝えている。

獅子舞の物語

初の庭【七五三掛り】（はじめのにわ　しめがかり）　新築された社殿に詣でるべく大獅子・中獅子・雌獅子の三獅子が神社にお参りし、社殿の造りや彫刻の美しさを眺めている内に、雌獅子を大獅子と中獅子で取り合う喧嘩が起きます。雌獅子は、花の中に隠れてしまい、それを探しながら大獅子と中獅子の喧嘩は続きます。しかし、この喧嘩は四勝四敗、解決されないまま別れて行きます。

中　庭【四幕抱き】（なかにわ　しまくだき）　春うららかな日、牡丹の花が見事に咲いた野原に、大獅子・中獅子・雌獅子が見物に出かけます。綺麗に咲き誇る花を見ている内に、雌獅子を自分の物にしたい気持ちから、再び大獅子と中獅子が喧嘩になり激しく戦います。しかし、この勝負も八勝八敗いずれともつかず、争いによって雌獅子を得られないまま別れて行きます。

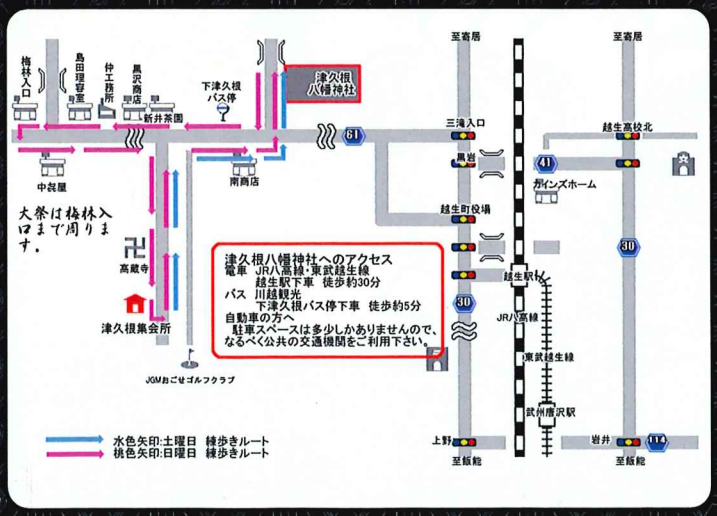
終の庭【花掛り】（しまいのにわ　はながかり）　雌獅子を自分の物にする為に喧嘩をした事の愚かさを悟り、大獅子と中獅子が自己の欲望を神に納めて、和解する気持ちになった時に初めて神より花を貰う事が出来、大獅子・中獅子・雌獅子の三獅子が仲良く夕暮れの武蔵野を帰って行きます。

雌獅子（メジシ）…メスの獅子。獅子頭の色は金、小旗注1の色は赤と黄で擬宝珠がある。

中獅子（チュウジシ）…オスの獅子。獅子頭の色は茶、小旗の色は青と白で二本の角を持つ。

大獅子（オオジシ）…オスの獅子。獅子頭の色は黒、小旗の色は白で二本の角を持つ。

花子（ハナゴ）…花笠をかぶり、ささら（竹製の楽器）を演奏する、四人の女の子。

蠅追（ハイオイ）…軍配やうちわ等を持ち、獅子の先導役をする於可女（オカメ）と瓢男面（ヒョットコ）。

注1：獅子頭 後方部の条紙は小旗（コバタ）と呼ばれ獅子の毛を表している物です。この小旗はユネスコ無形文化遺産に登録された東秩父村で購入した和紙を用い、役者や関係者が心を込めて一つ一つ手作業で作成した物です。津久根八幡神社の獅子舞の見所の一つでもあります激しい舞で多くの小旗が落ちますが落ちた小旗はとても縁起の良い物とされていますので拾って頂きお持ち帰り下さい。
（但し土俵内は舞中とても危険です。
舞が終了してからお願いします。）